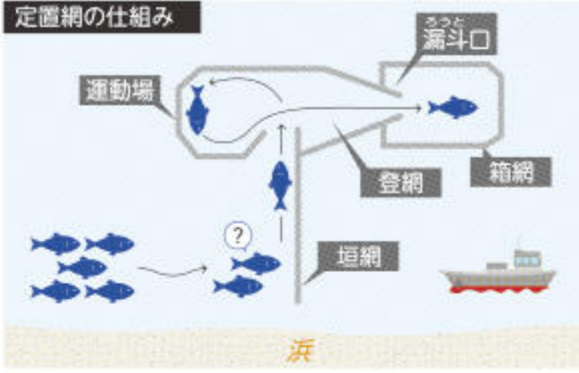


茨城の海、未来に紡ぐ

「常磐もの」
プロに聞く

東北地方から茨城県にかけての太平洋沖は、多彩な魚介類が取れる豊かな海だ。ここで取れた海産物は「常磐もの」と呼ばれる。1次産業共通の課題である後継者不足を抱える中、県内では若手の漁師が奮闘している地域もある。県内唯一の「定置網漁」を営む久慈町漁協瀬支所（日立市）を訪ね、海の恵みを次世代に紡ぐ取り組みを聞いた。



定置網の仕組み

1月末、漁協の漁船「おせ1号」と「おせ2号」が

県内で唯一となった定置網漁を行うのが、久慈町漁協瀬支所（日立市久慈町）。久慈漁港から沖合約5キロに網を設置し、タイやアジ、サバ、ヒラメなどを取っている。定置網漁は、海上に設置した網に魚を誘い込み、網を巻き上げる漁法。海岸線から沖に伸びる「垣網」に触れると沖に逃れようとする魚の習性を利用し、「運動場」「登網」を経てその先に構える「箱網」に魚を誘導する。魚群を追いかけると、魚は「待つ漁法」は、魚を取り過ぎず、環境に優しい側面も持つ。

定置網漁、若手が支える

出航を待っていた。船員たちはドラム缶でたい火に当たりながら、言葉少なに準備しながら夜明けを待つ。午前6時、計9人乗せた2隻の船が沖に向かった。海は穏やかで、波も少ない。

おせ1号を操船するのは漁労長の河田純さん（38）。30分ほどで漁場に到着すると、氷を船室に入れたり、ロープを巻き取り機にかけたりと、船員たちはきびきびと動き出す。河田さんは船から身を乗り出すようにして海中の様子を確かめながら、少しずつ網を巻き取る作業を進める。2隻の間隔がどんどん狭まっていく。

網の中にはそれまで見えなかった魚の群れが姿を現し、水しぶきを上げた。アジやウマヅラハギの中にタイが混じる。朝日に当たった銀色や赤色の身がキラキラと輝いた。船員たちは船のクレーンと大きな網を使い、魚をすくい上げていった。約2時間後、船が港に戻ると、船員たちの表情が緩む。てきぱきと動いて大量の魚を仕分けしていく。ひと段落つくと、「自宅用に」とアジやカワハギを包丁でさばく人もいた。

震災後、海に戻る

河田さんは栃木県小山市出身。子どもの頃から釣りが好きで、栃木の県立高校の水産科に進学した。「漁師になりたい」と親に伝え、日立市の漁協を自ら探し当てて職に就いた。

就職から約7年後、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、1度は漁師の道を離れた。漁場は津波の被害に遭い、肝心の定置網は流された。漁に出られない日々が続く。運送会社に移った。「やっぱり海がいたい」と1年ほどたつて漁師に戻った。仕事ぶりが認められ、20代後半で漁労長に任された。いろいろな魚が取れる漁場とはいえ、網を上げてみないと漁獲が分からないのも漁の一面だ。これまでにクジラやイルカ、サメがかかったこともあったという。最近では南方系のカラフルな魚を見ることが増え、魚の季節感が読めなくなってきた。

河田さんは年上の先輩たちに支えられるほか、同期の同僚や20代の後輩がいて、4月には18歳の新人が入ってくる予定だ。インドネシア人の漁師も2人いて、就業者は多様になっている。「漁を続けていくには人が大事」と、小学校に出向いて魚講座を開くなど後継者育成にも

進学した。「漁師になりたい」と親に伝え、日立市の漁協を自ら探し当てて職に就いた。就職から約7年後、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、1度は漁師の道を離れた。漁場は津波の被害に遭い、肝心の定置網は流された。漁に出られない日々が続く。運送会社に移った。「やっぱり海がいたい」と1年ほどたつて漁師に戻った。仕事ぶりが認められ、20代後半で漁労長に任された。いろいろな魚が取れる漁場とはいえ、網を上げてみないと漁獲が分からないのも漁の一面だ。これまでにクジラやイルカ、サメがかかったこともあったという。最近では南方系のカラフルな魚を見ることが増え、魚の季節感が読めなくなってきた。

魚のことを知って、
たくさん食べてもらいたい

日立・会瀬 河田純さん



獲が分からないのも漁の一面だ。これまでにクジラやイルカ、サメがかかったこともあったという。最近では南方系のカラフルな魚を見ることが増え、魚の季節感が読めなくなってきた。

河田さんは年上の先輩たちに支えられるほか、同期の同僚や20代の後輩がいて、4月には18歳の新人が入ってくる予定だ。インドネシア人の漁師も2人いて、就業者は多様になっている。「漁を続けていくには人が大事」と、小学校に出向いて魚講座を開くなど後継者育成にも

進学した。「漁師になりたい」と親に伝え、日立市の漁協を自ら探し当てて職に就いた。就職から約7年後、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、1度は漁師の道を離れた。漁場は津波の被害に遭い、肝心の定置網は流された。漁に出られない日々が続く。運送会社に移った。「やっぱり海がいたい」と1年ほどたつて漁師に戻った。仕事ぶりが認められ、20代後半で漁労長に任された。いろいろな魚が取れる漁場とはいえ、網を上げてみないと漁獲が分からないのも漁の一面だ。これまでにクジラやイルカ、サメがかかったこともあったという。最近では南方系のカラフルな魚を見ることが増え、魚の季節感が読めなくなってきた。

獲が分からないのも漁の一面だ。これまでにクジラやイルカ、サメがかかったこともあったという。最近では南方系のカラフルな魚を見ることが増え、魚の季節感が読めなくなってきた。



広告

ALPS処理水は、放出前に分析を行い、放射性物質が基準を満たしていることを必ず確認するなど、厳格に管理されて放出されています。これまでのところ、放出前・放出後のモニタリングの結果、いずれも問題のある数値は見られず、安全性が確認されています。

最新の状況※



基準を満たす

現在の状態※



異常なし

ALPS処理水の分析結果

東京電力及び第三者機関のJAEAが放出前のALPS処理水の分析を行い、いずれも基準を満たしていることを確認しました。

※2024年9月4日に採取を行ったALPS処理水（K4-Bタンク）※基準：トリチウム以外の告示濃度比総和1未満

海域モニタリング結果（海水・魚に含まれるトリチウム）

東京電力福島第一原子力発電所近傍海域のモニタリング結果について、異常はありません。

※最新の各機関での分析結果をもとにしています

一目でわかるマーク形式でモニタリングの結果を表示しているページはこちら



その他、ALPS処理水に関する情報はこちら

みんなで知ろう ALPS 処理水

検索

みんなでも
知ろう。
考えよう。
ALPS 処理水のこと